

## 「世界を翔ける翼一渡り鳥の壮大な旅」の紹介 その1～3

京都市山科区 須川恒(すがわひさし)

その1 プロローグなどから

その2 第1章スプーニー

その3 第1章スプーニー補遺 柏木実さんから

### その1 プロローグなどから

以下の文は、すでにメーリングリストの Kbird や JBBA で紹介した文である。今回アルラ秋号原稿としてまとめることにした。

2023年8月8日に監訳者の樋口広芳さんから以下の本が8月20日に出版されると連絡がありこんな本がでるとメーリングリストに紹介した。

スコット・ワイデンソール著『世界を翔(か)ける翼一渡り鳥の壮大な旅』

樋口広芳 監訳、岩崎晋也 訳。化学同人社刊

出版される直前の8月16日に化学同人社(京都にある)から樋口さんの依頼ということで1冊送られてきた(ありがたい)。

元の本は2021年出版。原題は

「A WORLD ON THE WING The Global Odyssey of Migratory Birds

by Scott Weidensaul 」

[https://en.wikipedia.org/wiki/Scott\\_Weidensaul](https://en.wikipedia.org/wiki/Scott_Weidensaul)

<http://www.scottweidensaul.com/>

高齢になると本の購入はなるべく避けて近所の公立図書館に依頼して買ってもらい読むことが多くなったが、図書館から借りた本は2週間(か4週間)で返却する必要があるし、鉛筆での書き込みもできない。現物の本があると、この本に触発されて思いついたメモもいろいろ書き込める。このメモをぼちぼち紹介しようと思った。この本の読者がどう感じられたかのやりとりができれば楽しい。

まずプロローグと謝辞、監訳の樋口氏による解説を読んだ。

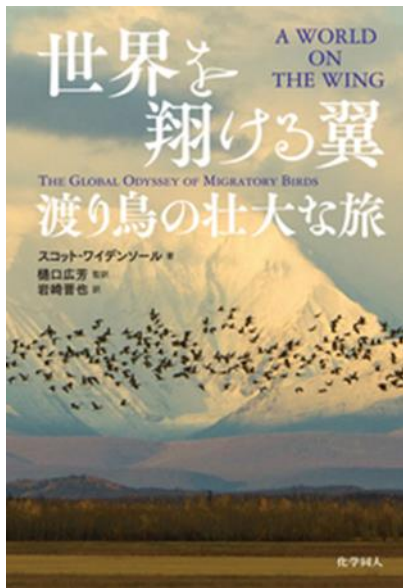
著者の人となりがよくわかる。彼は多くの著書もあるサイエンスライターで、渡り鳥に関しては20年前にも「風の上の暮らし(訳書はない)」を書いているが、今回の本はこの20年間の渡り鳥に関するさまざまな調査研究の進展に著者自身もいろいろなかかわりがあって描いた作品だとのこと。

著者はさまざまなプログラムを経験しているバンダーと言える。世界に200人しかいないハチドリ類への標識資格を持っている人とのこと。それだけに、ここ20年間の渡り鳥への研究に関する進展にも敏感なものがある。このスタンスは私もやや近いものがあり、著者がどのように渡り鳥研究の最新の進展を描くのかとても興味を感じる。

プロローグではアラスカの山中で、12mのカスミ網を張ってハイイロチャツグミを捕獲して小型のジオロケータを装着して越冬地の南米への長距離の渡り解明の調査をしている情景が出てくる。調査中にハイイログマの親子と遭遇するハプニングがある。

カムチャツカにおける日本鳥類標識協会による日ロ共同調査(1997~2000年)でも調査地におけるヒグマの動向は大きな課題だった日ロ共同調査報告(2010)は [https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jbba/22/0/\\_contents/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jbba/22/0/_contents/-char/ja/) (掲載論文にはそのあたりの事情は描かれていないが、鳥類標識協会バンダーニュースには掲載されている。協会員は今年からバンダーニュースの過去号をオンラインで読めるようになっている)。

この本は10章構成で本の目次は以下のようにになっている。何のことなのかわかりにくいタイトルもあり、著者がどのような切り口を設定しているのか読みすすめたくなる。



プロローグ

第1章 スプーニー

第2章 量子跳躍

第3章 定説は変わる

第4章 ビッグデータ、ビッグトラブル

第5章 キャリーオーバー効果

第6章 引き裂かれた季節

第7章 帰ってきたアギルーチョス

第8章 大陸棚の外

第9章 神の目を逃れる

第10章 エニナム——ふたつの愛

エピローグ

謝辞

解説(樋口広芳)

出版社のサイトは以下

<https://www.kagakudojin.co.jp/book/b628946.html>

## その2 第1章スプーニー

第1章のタイトルはスプーニー。これはヘラシギの愛称で、シギ・チドリ類全体の減少に警鐘を示す意味でもきわめて数の減ったヘラシギがシンボルボードになっていて関係者でプロジェクトが進んでいる。

例えば日本野鳥の会ヘラシギキャンペーン 動画もある。

<https://www.wbsj.org/activity/conservation/endangered-species/ep-index/>

章の内容は、ヘラシギの繁殖地、中継地や越冬地はどこにあるのかの探索、広域的に俯瞰しての重要な湿地の特定とそれぞれがかかえる保護上の問題、特に中継地として重要な黄海沿岸の干潟保護に関して中国の干潟を訪問したレポートが中心だった(お目当てのヘラシギには結局であえない…)。

自然保護活動家はさまざまなネットワーク(東アジアオーストラリア地域フライウェイパートナーシップなど)を活かして渡り鳥の視点から重要性を喚起できるものの、その保護についての決定は地方あるいは中央政府の手にゆだねられている現状がある(p40)。

でも著者が訪問する直前に中国政府(国家海洋局)は突然黄海海岸破壊を禁止する布告をだした。もうぎりぎりの黄海海岸の現状が描かれる。今後世界遺産やラムサール条約湿地として国際的にも保証された枠組みで保護される方向に向かうのか…(ラムサール条約ならば湿地のワイズユースも加味した保全となる)。

一方で (P65) ロシアのチュクチの生物学者によるメイニピルギノ村における「ヘッドスタート」(巣をみつけ卵をとりだして人工孵化などをして増やす。巣から卵をとってもうみたすので個体数が増加)も紹介。日本でもその関係の個体が見つかった。以下は2016年9月の山階研ニュース。

[https://www.yamashina.or.jp/hp/p\\_release/images/20160914\\_prelease.pdf](https://www.yamashina.or.jp/hp/p_release/images/20160914_prelease.pdf)

ちょっと脱線するがこのメイニピルギノ村は、1993年頃ハクガン復元プロジェクトで衛星発信機を装着したマガンが繁殖地と判明した地域。それまで鳥類関係者はあまり注目していなかった地域である。その少し北のアナディールでウランゲル島から運んだハクガンの卵を人工孵化して卵中の発生を確認したハクガンの卵をマガンの巣中の卵と交換する実験をしている(仮親作

戦)。ヘラシギのヘッドスタートも同じような手法を感じる。メイニピルギノに行ったと聞いている柏木実さん(ラムネット)はヘラシギ保護にもこだわっていたとのことだ(その3に詳細)。

黄海沿岸をめぐる問題は20年前からも指摘されていて、2004年12月に韓国・群山で開催された国際渡り鳥シンポジウムでも、黄海沿岸である韓国西海岸の干潟保護について多くの報告ややりとりがあった。この本を贈ってくれた樋口広芳さん(もちろん以前から知っていたが)とおつきあいをするようになったのはこの参加がきっかけだった。それについて以下の「韓国群山市国際渡り鳥シンポジウム参加報告」に書いている。

<https://www.dropbox.com/s/1zx2h5zdlxi02mj/Sugawa2005KoreaSympRep201412.pdf?dl=0>

あれからほぼ20年たつ。渡り鳥の生息地の悪化は続いているものの、世界の関係者が連携して研究や提言を進めることで、たしかな希望もいくつかあるとの章と思う。

### その3 第1章スプーニー補遺 柏木実さんから

第1章ではロシアのメイニピルギノでのヘラシギのヘッドスタートの紹介があったが。メイニピルギノに行ったと聞いている柏木実さん(ラムネット)はヘラシギ保護にもこだわっていたとのことなので詳細を問い合わせたら柏木さんからメールとともに3本の紀行文をお送りいただいた。

柏木さんからのメールより

「須川様 2002年にチュコト北部ベリャカ洲、2003年にチュコト南部のメイニピリギノでの調査に行った紀行文(これは二つ)です。

2002年に私が行ったときはベリャカ洲20巣程度と2003年のメイニピリギノには30巣程が営巣していたのですが、その後急速に減少、ベリャカの営巣は無くなり、メイニピリギノも激減する中で、2005年以降大きなNGOが関心を持ち出し、2010年以降になって産卵した卵を英国で人工繁殖するプロジェクトと現地での孵卵器を使ったヘッドスターティングが始まっています。取り組んだ研究者はネイニピルギノの研究者というよりはエフゲニー(エフゲニー・シレチコフスキー;「シジュウカラガン物語」でも登場)などロシアやヨーロッパの研究者たちがメイニピリギノで行ってきました。

ヘッドスターティングの紹介は BirdsRussia の

<https://birdsrussia.org/projects/head-starting-program-to-boost-the-wild-breeding-sbs-population-in-russia/>

にあります(ヘッドスタートをしている写真もあります)。

メイニピリギノではマガン、ハクガンだけでなく、オオヒシクイの標識調査もメイニピリギノの直ぐ北側のヴァーモチカ湖で行われ、標識鳥が宮城県北部に来ていることが確認されたと呉地さんが言ってましたが、この調査で、換羽時のガンを捕まえる時のガンの足の速さ、力の強さなど捕まえるのに大変苦労した、という話しを調査員の方から聞きました。柏木 実」

送ってもらった 3 本の紀行文を読んだ。いずれも調査を支援してくれた NGO(海外を含む)への概要報告と、調査でフラッグをつけたシギ類などの個体を中継地や越冬地で観察して報告して欲しいと依頼する紀行文だった。

これらの紀行文を読んでわかることは、1996 年頃からラムサール条約加盟国がつくった東アジア・オーストラリア地域水鳥フライウェイネットワークのプロジェクト(2000 年代になって EAAFP に継承)での国際連携として各国の研究者や NGO がかわり、調査研究費も各国から得ているスタイルで進んでいるという点で、関係者の会議でそれぞれの国や NGO がやれることを戦略計画としてまとめ実施していくというスタイルになっている点である。このような体制ができたことが、あらためてここ 20 年間の進展だと気づいた。

3 本の紀行文のうち 2003 年の 2 つのうちの一つが調査の雰囲気や参加者などがわかるので紹介する。図と写真は割愛するが以下にある。

マイナピルギナからの便り      2003 年繁殖調査報告から      柏木 実  
地図と写真は以下

<https://www.dropbox.com/scl/fi/ij4mvilxn4e0cs7jls2dc/Kashiwagi2003aFigs.jpg?rlk=ey=q7hfnjfu2fisv1qznwbn5j49z&dl=0>

第 1 便 (2003 年 7 月 12 日)

昨年は 7 週間の調査期間中、ほとんど連絡ができませんでした。水鳥たちの繁殖地はそんな人間の生活圏から離れたところにあります。今年の調査は村(集落といったほうが日本人の感覚にあてはまりますが)で最初の電話を引いたという、ラマン・ラガロチェフという方の全面的な協力をいただいております、

ファックスを送れます。

今年も、調査地に到着したのは成田を出てちょうど1週間目です。モスクワ-アナディルは週2往復、アナディルからは1往復なのですが、アナディルというチュコト自治区の首都で3日待っても、天候が悪くヘリが飛ばず、イワシなどを加工する漁船に乗せてもらいました。5月末にモスクワを出た先発隊は、途中アナディルで2週間もヘリコプターを待たされました。

ここはマイナピルギナというチュコト半島南部の村です。マイナというのはチュコト語で「大きな」という意味、ピルギナは「潟湖」で、近くにペクルニー湖という南北25km、東西30kmくらいの湖があります。左の地図のような場所で、調査はこのマイナピルギナを中心に50-100kmの範囲で行います。全鳥類のセンサス(個体数)調査と、シギ・チドリ類とガン類の繁殖調査です。

ガン類は、このマイナピルギナの北西30kmくらいにあるヴァーモチカ湖で繁殖するマガンの調査です。このプロジェクトは、日本雁を保護する会とロシア科学アカデミーとの共同プロジェクトです。日本にやってくるための、数字の入った色のついた首環をつけます。雛たちの羽化が始まり、成鳥たちは渡りの前に新しい羽を準備するために換羽する時期に入ったこの時期、捕獲を始めます。10日、11日は私もキャタピラー車で連れて行ってもらいました。河口の少し上流は長野県の安曇野の風景で、植生は7月のアルプスのお花畑にそっくりです。抱卵をこのあたりで行った後、河口部で換羽を行いますが、韓国のナクトン江河口の数倍、小櫃川河口の数十倍の広さがあり、植生が豊かで、中州の発達した地形です。ガンたちは、飛べなくなるこの時期、中洲に移って、外的に襲われないようにして換羽を終わらせます。(しかし抱卵中にシロギツネや、ヒグマなどに襲われたものが、なんと50%近くとか。)

シギ・チドリ類の調査の方は、日本湿地ネットワークがロシア科学アカデミーと行なっているプロジェクトで、これはマイナピルギナの集落のすぐ外から、20-30kmくらいの範囲で、ヘラシギを中心としてさまざまな種の繁殖の様子、営巣環境を調べています。ハマシギは、私の到着が遅れたので、すでに孵化が終わっていきそうです。捕獲が困難になりますが、できるだけ多くの標識鳥を増やそうと思っています。ただ、アラスカではすでに200羽弱のハマシギの標識鳥が放鳥され、すでに日本、台湾で観察されているのに、チュコトでも150羽くらい標識したのですが、フラッグ観察がありません。このことは、チュコトから日本に来る割合が、アラスカよりずっと少ないということかもしれま

せん。ヘラシギについて、今年はこれまで考えられていたよりもずっと奥地での営巣が見つかりました。中継地や越冬地できちんと調べる必要がさらに出てきました。ここはハマシギやヘラシギ以外にも、ムナグロ、メダイチドリ、ハジロコチドリ、オバシギ、ヒバリシギなど 16 種ものシギ・チドリ類が、それぞれかなり違う環境で繁殖している重要な繁殖地です。

これまでの調査の結果全世界の個体数 3-500 羽と推計されるヘラシギは、韓国の全羅北道の干拓現場セマングムが最大の渡りの中継地です。この、諫早干拓の 11 倍の干拓面積を持つ事業の開発者たちはシギ・チドリ類がどこにでも生息地を見つけて移動できるから、あの大きな中継地を埋め立ててよいと主張しています。このことは、この繁殖地全体を埋め立てても他で繁殖できると主張しているようなもの、とチームの人たちも怒っています。

というわけで、私はここで、両調査地合わせて 11 名（ロシア 7、ドイツ 3、日本 1）のメンバーと 7 月 4 日から調査を始め、毎日 10km くらいフィールドを歩き回っています。おかげでかなりのダイエットです。ではまた。

## 第 2 便（7 月 20 日）

11 日に先発隊のうちリーダーのエフゲニー(シレチコフスキー)を含む 3 人が帰りました。

ガンは子育てが一段落して換羽を始めます。羽がなくなって飛べなくなるこのときを見計らって、ガンの捕獲を始めます。研究者で、サブリーダーのヴァロージャがヴァーマチカへ移動（33 km を徒歩!!）したので、シギ・チドリ部隊は 2 人になりました。

ヘラシギはマイナピルギナ集落のすぐ近く（一番近いのは 200m 弱）でも営巣しており、そこから、この一帯の一辺 20 km 位を調査しています。10km 以上のところは、地域の人でオートバイ（サイドカーつき）を持っている人に頼んで運んでもらいます。私の方は、ハマシギを探して歩きまわっています。ハマシギは、ここでは湖の西側にある氷河の侵食丘陵の間のツンドラに営巣しています。丘陵地は、起伏に富んで、残雪が水になって残り、圏谷がいっぱいあって、適当な高さの草が生えた湿地で、ハマシギが営巣地としてよさそうなのですが、なぜか北の方（ベースとなっているフラットから遠い方に）にしかいません。それで私は、ハマシギを求めて村から、直線距離で、4～8 km あたりの圏谷を歩いていました。

ツンドラの湿地を歩いていくと、営巣中や、ヒナを連れてくる親鳥が私を見

つけて警告の声を上げます。シギ・チドリ類であれば、その声と、その後の行動を観察して、巣があればそこにワナをしかけて、卵を暖めに戻った親を捕まえます。親鳥の本能を利用するのに、抵抗感もあります。東京湾でも、チュコトでも 25 年間に 75%も減少しており、適切な対策がとても大切です。

シギ・チドリ類の調査をするメンバーを紹介します。

11 日に帰ったのが、この調査のリーダーのジュニア・シロエチコフスキー（ロシア科学アカデミーの生態・環境研究所とガン研究会（RGG）の責任者で、北極圏踏査を 90 年代から企画）。彼の連れ合いのレナ・ラッポ（科学アカデミーのシギ・チドリ類研究会の研究者）。それと、ロンドンにあるボン条約関係の研究所で働いているドイツ人のクリストフ・ツェックラー。彼もシギ・チドリ類担当。私と一緒に残ったのが、昨年もベリヤカ洲で一緒に一ヶ月調査したヴァーニャ・タルジェンコフ。彼は 5 月に昨年の調査でディプロマ（日本の修士論文）を出しました。主にヘラシギの生態調査をしています。それと先ほどのヴァロージャ・マローゾフ。彼は 70 年代終わりに、この調査の共同研究者でもあるパヴェル・トムコヴィッチの指導でトウネンの研究を行って以来、シギ・チドリ類から、ガン・カモ他さまざまな鳥類の研究をしてきた人です。

第 3 便（8 月 1 日）

踏査も次第に終わりに近づきました。予定では、10 日に、チュコト政府で使っているヘリコプターが私たちと、踏査機器など一切をアナディルまで運んでくれるはずになっているのですが、…[結局ヘリは飛ばず、16 日にキャタピラーで出発。アナディルについたのは 20 日早朝だった。]

\* マガン担当のメンバーについて：ずっとヴァーモチカに貼りついているのが三人の大学生、モスクワ大学 4 年生（来年に論文）のフェージャと、ドイツのイエーナ大学 4 年生のマティアスとアンナです。中心はヴァロージャ。ディーマ・ダブルイニンは、モスクワ大学のリモートセンシング研究室の中心人物で、石油など鉱物資源に関する仕事もしてきていますが、ガンの生息地と衛星画像の関係を調べてきていて、ヘラシギの生息地を衛星画像から把握し、保護のための情報にしていこうという今回の調査のひとつの分野を担当しています。もう一人のアレクサンドル・アルトウチョフは、ガンの調査にずっと参加してきた獣医学校の先生です。年長者で、私くらいの年齢だと思いましたが、聞き出せていません。ユーモラスな人です。[実は私が最年長だった]

\* マガンの調査について。マガンチームのキャンプしているヴァーモチカ



湖はマガンの繁殖地です。少し奥地にヒシクイの繁殖地もあり、数十の個体が生息していますが、マガンはおそらく 1000 羽ぐらいがここで繁殖しているとのことです。マガンたちは、ヴァーモチカ川の河口にあたる湖よりも 2km くらい上流のデルタ地帯に分散して営巣しています。雛が孵ったあと、同じところで給餌や保護の必要がなくなるまで過ごします。

親鳥たちはその後渡りに備えて、換羽します。この間は、ほとんど飛ぶことができなくなるので、周りを水で囲まれ、隠れ易い、河口近くの丈の高い草の生えている島に移動し、じっと潜みます。踏査チームは前半、デルタの中の、少し高い丘陵をベースキャンプとして、営巣状況を調査していましたが、換羽にあわせてキャンプを河口近くに移し、飛べなくなった彼らを捕獲し、標識リングをつけ、首に数字のついたカラーリングをつけて放鳥しています。

マガンは 2-3kg もあり、力も強いので、まず捕獲網のための杭を立てて放置し、警戒心を解いてから網を張り、網に追い込んで捕獲します。島の上を走りまわるガンを追いかけたり、水に逃げた個体を捕まえたり、という作業になります。かなりの知識、知恵と、体力、泳力が要求されます。27 日に戻ってきたディーマの腕や体には、爪による掻き傷や、嘴による突き傷がいっぱいでした。(私自身はハマシギを主に、小型のシギ・チドリ類を探し回っているので、ガンの調査には加わっていません。全て伝聞です…)

フィールドの色が変わってきました。足元の植物が紅葉し始めました。ここは北極圏から少し南に外れた所がありますが、確実に秋に向かっていきます。ずいぶん静かです。鳥たちは子育てを終えて、渡りの準備に移動し始めたようです。それでは。

[2003 年の南への渡り、チュコトからのハマシギはまだ見つかりません。しかしヘラシギは一昨年(2002)年の東京湾に続いて、昨年の夏フラッグをつけた幼鳥の一羽が、今度は 9 月 22 日に韓国のセマングムで観察されました。(写真 1。右足間接の上にフラッグがある)また、ヴァーマチカで標識をつけた 55 羽のマガンのうち、11 月はじめの段階で 45 羽が宮城県にやってきたことが確認されました。

このチュコトでのシギ・チドリ類調査は 2000 年の繁殖期から、これまで WWFJ、トヨタ財団、経団連自然保護基金の助成を受けて続けてきました。

援助が続けて受けられれば、2004 年も 5 月末から、8 月までマイナピルギナで調査を行います。韓国市民たちが 11 月からセマングムで始めている毎月

の調査とも連動し、中継地での観察を増やしたいと思っています。シギ・チドリ調査の様子は次号でお伝えします。

(2004年1月 柏木実)]

---

以上が柏木実さんからの2003年調査の紀行文の一つである。

国際的な連携の下で進められている現地調査の様子を知ることができる貴重な紀行文だと思う。これだけの人脈の人たちがその後どのような活動を20年間つづけていたのか、日本にはほとんど伝わっていない現実があると思う。

龍谷大深草学舎のチェーンレクチャー「日本の自然」に担当の谷垣岳人さんと相談して今年7月に柏木実さんに特別講義をしてもらった。オンラインで事前に収録した講義を2クラス(計300名)の学生が聞いた。講義の内容はNGOとしてシギ・チドリ類へのこだわりからオーストラリアでラムサール条約に出会った柏木さんの原点の話(1996年の体験)が中心だった。

学生たちからのレポートを読むと、彼の人生に興味を持った学生も多く、反響が大きかった。講義内容を検討する際に、ヘラシギプロジェクトについての紹介もいかもとの話でたが、これは今後の課題として残っている。

### その3 おわり

「世界を翔ける翼」は最後までざっと通読した。各章ごとの読み込みと紹介は今後の課題だが、章ごとにかなり独立した内容も扱われている。例えば「第8章 大陸棚の外」はスケールの大きい海鳥の生態や保護に関心を持つ人向けだし、「第9章 神の目を逃れる」は深刻な密猟問題と対峙する人には関心が深い章と思う。みなさまにとって気になる(勉強になる)章がきっとあると思う。